主编 张再良

日本語で中医を語る

（中医日语）

SHANGHAI UNIVERSITY OF T.C.M. PRESS
上海中医药大学出版社

日本語で中医を語る

（中医日语）

责任编辑　黄　健
技术编辑　徐国民
责任校对　郁　静
封面设计　王　磊
出 版 人　陈秋生
http://www.tcmonline.com.cn

ISBN 7-81010-918-9

9 787810 109185 >

ISBN 7-81010-918-9
R·866 定价 28.00元

日本語で中医を語る

（中医日语）

主　编：张再良
副主编：栗田隆　三成由美
陈晓　姜德友　蒋明

上海中医药大学出版社

责任编辑 黄 健
技术编辑 徐国民
责任校对 郁 静
封面设计 王 磊
出 版 人 陈秋生

图书在版编目(CIP)数据

中医日语 / 张再良主编. 一上海：上海中医药大学出版社，2005.11
ISBN 7-81010-918-9

Ⅰ.中... Ⅱ.张... Ⅲ.中医学—日语 Ⅳ.H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2005)第 127446 号

日本語で中医を語る(中医日语) 主编 张再良

上海中医药大学出版社出版发行 (http://www.tcmonline.com.cn)
(上海浦东新区蔡伦路 1200 号 邮政编码 201203)
新华书店上海发行所经销 南京展望文化发展有限公司排版 上海申松立信印刷厂印刷
开本 890mm×1240mm 1/32 印张 11.375 字数 284 千字 印数 1—1 100 册
版次 2005 年 11 月第 1 版 印次 2005 年 11 月第 1 次印刷

ISBN 7-81010-918-9/R·866 定价 28.00 元
(本书如有印刷，装订问题，请寄回本社出版科，或电话 021-51322545 联系)

编写说明

中医院校中学习日语的本科生、研究生，在完成了公共日语的学习之后，往往苦于在专业领域中还不能自如地进行表达和交流，故还有想在专业日语方面进一步熟悉和掌握的愿望。本教材就是针对这一情况，并结合多年《中医日语》的教学实践逐步编写而成的。

本教材的内容由三大块组成。第一部分为“基础理论篇”，主要围绕中医的基础理论展开，以“中基”和“中诊”的内容为主，并加入了中药学和方剂学总论的内容（包括药膳）。在每一章节后列出常用词汇表，并注有发音。第二部分为“临床基础篇”，主要以《伤寒论》和《金匮要略方论》的原文为主，根据内容作了适当的归纳整理。原文以直译的形式，未加发挥，以便熟悉日语古文的表达方式。篇中还加入了叶天士的《温热论》。第三部分为“附录”，收集了常用的相关名词术语，便于学生掌握发音。

本教材适合于中医院校学习日语的学生以及社会上有日语基础且对中医感兴趣者阅读和使用。

本教材的编写出版受到了上海中医药大学各级领导的支持和关心，日本留学生谷口直子、平川雅之、绿川沢樹、田边ひろみ、小柳彩子等对本书提供了很多帮助，研究生杨文喆也协助做了不少工作，在此一并向上述人士表示真诚的感谢。

用日语确切地表达中医的内容，尚有许多方面可以探讨，本教材虽

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

然暂时得以出版，但存在的问题一定很多，祈望同道们的批评指正，以便在再版时改正。

张再良

2005 年 7 月

はじめに

日本語を第二外国語として学ぶ中医薬大学学生や院生が使用できる日本語による中医教材の編纂を、上海中医学大学留学時の恩師である張再良教授の計らいで、上海の日系外資診療所で診療に従事する私も微力ながらお手伝いさせていただくこととなり、このたび出版の運びとなりました。

主編者の張再良教授は、以前より中日の伝統医学交流に尽力されてこられました。中国の中医学と日本の漢方の学術交流ははるか長い歴史を有しますが、本書の出版により相互交流のための中国における基礎環境がさらに整えられることが編者一同の願いでもあります。

中国で最初から日本語で企画された中医学書として、中国在住の日本人の方々や、さらに機会があれば、日本の読者の方々にもご一読いただき中医学への理解を深めていただく一助になれば幸いです。

本書ではもともと難解な中医学の内容を、日本語で理解するために、その日本語表現の的確さを心がけました。今後、内容、表現等につきましては、より充実させてゆくため、読者の皆様のご意見、ご批評をいただいて改訂を加えてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、本書の編纂にあたり、多くの方々にご尽力を得ましたことを感謝申し上げます。

栗田　隆

2005年秋

目　次

基礎理論編

第一章　中医学の歴史 …… 1
一、基礎を確立した秦漢時代 …… 2
二、内容を充実させた唐宋時代 …… 3
三、体系が成熟した明清およびその後の時代 …… 5

第二章　中医理論の特徴 …… 8
一、整体観 …… 8
二、弁証観 …… 10
三、恒動観 …… 11

第三章　中医理論の基礎 …… 14
一、元気説 …… 14
二、陰陽説 …… 15
三、五行説 …… 17

第四章　中医学の人体観 …… 21
一、気血精津液 …… 21
二、臓腑経絡 …… 26
三、体質 …… 31

第五章　中医学の発病観 …… 37
一、病因 …… 37
二、病機 …… 43

第六章　中医の診察法 …… 47
一、望診 …… 47
二、聞診 …… 50
三、問診 …… 50
四、切診 …… 53

第七章　中医の弁証法 …… 57
一、八綱弁証 …… 57
二、気血津液弁証 …… 67
三、臓腑弁証 …… 74
四、病邪弁証 …… 91
五、六経弁証 …… 96
六、衛気営血弁証 …… 100
七、三焦弁証 …… 102
八、経絡弁証 …… 103

第八章　中医の治療法 …… 107
一、治療原則 …… 107
二、治療方法 …… 111

第九章　中薬学について …… 116
一、起源と発展 …… 116

二、産地と採集 …… 119
三、炮制 …… 120
四、薬性 …… 123
五、配合と禁忌 …… 128
六、用量と使用方法 …… 131

第十章　方剤学について …… 136
一、起源と発展 …… 136
二、方剤と治療方法 …… 138
三、方剤の分類 …… 142
四、組成と変化 …… 143
五、剤型 …… 146

第十一章　薬膳の概要 …… 153
一、薬膳とは …… 154
二、薬膳の歴史 …… 156
三、薬膳の食材 …… 161
四、薬膳の性能 …… 161
五、薬膳食材の配合 …… 165
六、薬膳食材の調理方法(剤型) …… 167
七、性質による食材の分類 …… 169

臨床基礎編

第一章　『傷寒論』六経病証治提綱 …… 171
一、太陽病 …… 171
二、陽明病 …… 192

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

三、少陽病 …… 203
四、太陰病 …… 208
五、少陰病 …… 210
六、厥陰病 …… 215

第二章 『金匱要略方論』証治提綱 …… 222
臓腑経絡先後病脈証第一 …… 222
痙湿暍病脈証治第二 …… 227
百合狐惑陰陽毒病脈証併治第三 …… 231
瘡病脈証併治第四 …… 233
中風歴節病脈証併治第五 …… 235
血痺虚労病脈証併治第六 …… 237
肺痿肺癰咳嗽上気病脈証治第七 …… 239
奔豚気病脈証治第八 …… 242
胸痺心痛短気病脈証治第九 …… 243
腹満寒疝宿食病脈証治第十 …… 245
五臓風寒積聚病脈証併治第十一 …… 248
痰飲咳嗽病脈証併治第十二 …… 252
消渇小便不利淋病脈証併治第十三 …… 257
水気病脈証併治第十四 …… 259
黄疸病脈証併治第十五 …… 265
驚悸吐衄下血胸満瘀血病脈証併治第十六 …… 269
嘔吐噦下利病脈証治第十七 …… 271
瘡癰腸癰浸淫病脈証併治第十八 …… 276
趺蹶手指臂腫転筋陰狐疝蛔虫病脈証治第十九 …… 277
婦人妊娠病脈証併治第二十 …… 278

婦人産後病脈証治第二十一…… 280
婦人雑病脈証併治第二十二…… 283

第三章　『温熱論』論治提綱…… 287
一、温病の大綱…… 287
二、邪は肺衛にある…… 287
三、邪は気分に流連する…… 288
四、邪は三焦に留まる…… 289
五、湿邪を論ずる…… 289
六、邪は陽明に裏結する…… 290
七、邪は営血に入る…… 291
八、舌診について…… 292
九、斑疹について…… 295
十、白痦について…… 296
十一、歯を験する…… 296
十二、婦人の温病について…… 297

附　録

一、常用中薬名…… 300
二、常用方剤名…… 313
三、常用食材名…… 326
四、常用穴位名…… 331
五、常用疾病名…… 340
六、常用解剖名…… 345

主要参考文献…… 349

基礎理論編

第一章　中医学の歴史

中医学は、中国における数千年の歴史的経験を総括したものであり、疾病に対する豊富な経験と理論的知識が含まれている。中医学について、現存する文献は6000種類以上を数え、中医臨床の治療方法も多彩で、薬物を使用する以外に鍼灸・推拿・導引・外治などがある。薬物の種類も非常に多く、一般に流布している本草書の記載でも2500種類前後に達する。

中医学を歴史的に遡ると、次のように認識することができる。

先ず、医薬は日常生活や生産労働の中から生まれてきたものであることを理解しなければいけない。はるか古代から、生産労働に従事したり、自然災害・毒邪・猛獣などに対処する中で、疾病を予防し治療するという活動が行われてきた。食用になる植物を求める過程で、あるものは食後に反応が起きるので、食用にはならないが次第に薬用できるとの認識に至ったのが、植物性の薬物による疾病の予防と治療の起源であった。また、石器を生産工具として応用すると同時に、砭石や骨鍼で膿瘍などを刺して排膿や瀉血を行ったのが、鍼刺療法の起源である。火に当たって温めたり按摩すると快適になり痛

みが止ったりすることも次第に治療に応用されるようになり、これが灸法や推拿療法の起源となった。以上のように、自然発生的な医療活動の中で経験に経験を重ねて、やがて一つの認識あるいは理論にまとめられるようになり、文字によってこれを記録し、後世の人々に伝えられるようになった。

文字的な記録がある歴史からみると、中医学の成り立ちは、大体次のような三つの段階から成っている。

一、基礎を確立した秦漢時代

1. 理論

中医学の基礎理論を築く文献的なものは、『黄帝内経』という書物である。『黄帝内経』の編纂は、一般に戦国時代から始まって前漢に至り完成したと考えられている。この時期の医学経験をまとめたものであるので、ただ一人の手によってできあがったものではなく、論点に相互の食い違いもよく見られる。理論の面では当時に流行した陰陽五行説によって、人体・病気・治療などを解釈したものが大多数である。今日の中医基礎理論の中では、陰陽五行・気血津液・臓腑経絡・病因病機・治療原則など一番基本的なものは、すべて『黄帝内経』からのものだと言える。

2. 臨床

後漢末年に張仲景が『傷寒雑病論』という書物を著した。その中で当時の疾病に対する予防と治療の豊富な経験と医学理論の知識をまとめた上で、自分の臨床経験を結びつけ、疾病を傷寒と雑病に大別して記述し、臨床治療の原則であるところの、いわゆる弁証論治を確立

した。この書物は、今日では『傷寒論』と『金匱要略方論』の二冊に分けられ、それぞれは外感熱病(急性病)と内傷雑病(慢性病)を論じる内容となっている。張仲景は六経弁証を定めることで、中医臨床の発展に多大な貢献をした。

薬物の書物としては、漢代に成書となったと考えられている『神農本草経』がある。この書物は漢代以前の薬物に関する知識をまとめており、収蔵された薬物は365種類にのぼる。その内訳は、植物薬が最も多く252種類、動物薬が67種類、鉱物薬が46種類である。『神農本草経』は現存する医学文献の内では最古の薬物学の書物である。

方剤の書物としても、やはり張仲景の『傷寒雑病論』は一番最初の体系的な書物といえる。麻黄湯・桂枝湯・白虎湯・承気湯・小柴胡湯・大柴胡湯・理中湯・四逆湯・五苓散など数多く、経方といわれるものは全てこの書物からの方剤であり、今日の臨床でもよく愛用されている。

二、内容を充実させた唐宋時代

1. 蓄積

薬物(方剤)と病気についての認識は、この時代において落ち葉のように次第に積み重ねられていった。薬物の方面では、『神農本草経』の365種類から、梁代の『名医別録』の730種類まで増補された。唐代には国家の組織力によって『新修本草』を編集し、659年に完成させて全国に配布した。この本は中国の国家レベルで刊行した第一号の薬典であり、また世界でも最も古いものである。『名医別録』から李時珍の『本草綱目』までの期間に、薬物学を全面的に改訂する試みが集団により5回、個人により4回行われた。薬物の種類も新たに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com